

令和八年五月度
御報恩御講

あきもと ご しょ
『秋元御書』

弘安三年一月二十七日

五十九歳

うつわ よ とが いち ふく もう
器に四つの失あり。一には覆と申してうつぶけるな
り。また くつがへす、また ふた に ろ
もう みず さん う もう
申して水もるなり。三には汗と申してけがれたるなり。
みずきよ ふん い うつわ みず もち こと
水浄けれども糞の入りたる器の水をば用ふる事なし。
し ぞう はん あるい ふん あるい いし あるい すな あるい つち
四には雑なり。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土
まじ ひと く こと うつわ われら しんしん
なんどを雑へぬれば人食らふ事なし。器は我等が身心
あら われら こころ うつわ ごと くち うつわ みみ うつわ
を表はす。我等が心は器の如し。口も器、耳も器なり。

(御書一四四七〜五行目～八行目)

■ 強調 ・ 確認 ■

本日拝読の『秋元御書』は
「器の四失」について仰せで
す。

器にも色々なものがありま
す。磨かれたきれいな器もあ
れば、割れたり、欠けていた
り、ヒビが入っていたりして
使うことができないものもあ
ります。

また割れていなくても汚れていたり、ふたが開かなかったりなど器として使えないようなものもあります。

そのような色々な器の状態を私達の信心に譬えたものが「覆・漏・汙・雑」の四失です。

先ほども説明がありましたけれど、再度申し上げますと、「覆」とは、ふたに覆われて閉まっている状態で、心を閉ざして話を聞こうとしない状態のことです。主には未だ信心をしていない未入信の方のことといえます。

「漏」とは、器から水が漏れる意味で、周りの悪縁や誹謗中傷にあって信心が疎かになり薄れてしまうことをいいます。

「汙」とは、器自体が汚れているため、その中身まで汚れてしまうことをいい、せっかく清浄な信心をしているのに、自分勝手な考え、我見や慢心によって汚してしまい、功德を失ってしまうことをいいます。

「雑」は混ざるという意味で、正しい教えに、他の間違った教えを混ぜてしまうことをいいます。御本尊様を信じていながら、他宗のものに手を合わせたりして謗法与同をしてしまうことをいいます。

大聖人様の正しい信心をしている私達ですが、この四失を戒めなければなりません。

大聖人様は、『日嚴尼御前御返事』に、

「叶ひ叶はぬは御信心により候べし。全く日蓮がとがにあらず」と仰せられています。

御本尊の功德は絶対であつても、私達の信心が弱かったり、先ほどの四失のある信心をしていたのでは何事も叶わないのであります。

『三大秘法稟承事』には、

「末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」

と仰せのように、自行化他にわたる信心、自分だけという信心ではなく、

他の人もこの御本尊様のもと
に導いていく化他行、すなわ
ち折伏をしていくことが大事
であり、この自行化他の信心
に励むところに、私達の願い
も叶えられていくのでありま
す。

御法主上人猊下は、

「疑惑を断じて、清浄な心で
御本尊様を信じ敬い、「無疑
曰信」の信心を貫きとおすところ、必ず成仏を遂げることができる」

と御指南です。

器の四失に自分の信心が当てはまっていないかを今一度見つめ直し、清らかな信心で日々お題目を唱え、そして化他行である折伏を行じて縁のある人をこの御本尊様のもとに導き、自他共に幸せになっていくことができるよう精進して参りましょう。